

一般社団法人 自転車駐車場工業会 「子乗せ自転車用 スライド式サイクルラック」 技術基準 認定第1号が誕生

(一社)自転車駐車場工業会が新たに策定した「子乗せ自転車用スライド式サイクルラック」技術基準、初の認定最終審査が3月3日に行なわれ、株式会社ダイケンの「SR-SW-30」が第1号認定を受けることになった。



自転車完成車販売台数が全体的に減少する流れの中、唯一の光明といえるのが電動アシスト自転車の躍進だ。中でも子どもを乗せての幼稚園・保育園の送り迎え等の移動で全国のママたちに人気の子乗せ電動アシスト自転車の伸びは顕著でメーカー、販売店にとっては期待の商材であり、今後も注力の車種であることは間違いない。こうして各メーカーが開発に注力することで、ユーザーにとっては次々と新車が出て選択肢が増えていく。両者にとってまさに好ましい状況となっているが、一方で問題なのが駐輪場だ。重量は30kgを超え、20インチが主流である最近のモデルのホイールベースは26インチ軽快車よりも長い。従来の駐輪場ラックでは(製品によっては)「規格外」となってしまう、安全性が担保されないのである。独自に駐輪ラックの技術基準を策定するなど、駐輪場の「安心、安全」のための取り組みを行っている(一社)自転車駐車場工業会にとって、これら子乗せ電動アシスト自転車に対応する

のことはもちろん、それで目的が達せられたわけではない。この基準に適した製品が世の中に出回らなければ意味がない。まずは認定第1号の登場が待たれていた。子乗せ電動アシスト自転車が急ピッチで普及しているのは誰もが知るところで、各ラックメーカーもすでに対応はしている。それら対応モデルの中にはかなり高基準のものがあったが、同会が求める基準はやはり厳しく既存仕様のままクリアできる製品はなかったようだ。そんな中、この3月によりやく最終審査まで辿り着けたのがダイケン。同社の「SR-SW-27」をベースに、基準を満たすためにラック間のピッチ幅を変更するなどしたものだ。強度テスト、約6000回の出し入れ実験、約500時間にも及ぶ塩水噴霧試験等の耐久実験と、長期間にわたる予備テストを経て去る3月3日、ダイケンの千葉工場内で最終審査が開始された。

「これを皮切りに3社、4社と 他のメーカーにも参加してほしい」 ——西出審査委員長

最終審査は実地テストということで、実際の使用シーンに基づき行われる。審査を行うのは同会の審査委員会で、西出幸伸審査委員長を含めた4人の審査員が申請書類と照らし合わせ現物の各サイズ、スペックに間違いがないかを確認した後、

形状やタイヤサイズの異なる複数のタイプの子乗せ電動アシスト自転車ですべてに出し入れを行い、23の項目について検証していった。この最終審査が「難関」と称されるのは、ただ単にサイズや操作力などの数値が適合していれば合格ということではないからだ。審査員が何度も自転車を替えながら入庫動作を繰り返し、少しでも気になる点が見つかり改善の必要性があると判断されれば認定は下りない。過去にも図面や数値では見えなかった問題点がここで初めて浮き彫りとなり、「改善後に再審査」となった例は多くあった。ましてや今回は長い期間をかけ詳細な部分まで徹底して定められた新たな技術基準、さらに第1号認定品にその後不備があっては決してならないことで審査員もいつも以上に慎重になるはず。ところが、この日は一般車向けスライド式ラック、垂直2段式ラックを合わせ3つの製品が同日に審査を受けることになったのだが、3製品中、最も時間がかからなかったのがこの「SR-SW-30」だった。意外なほどスムーズに審査は進み、すべての項目をクリア。晴れて第1号認定が下りることになった。なお、これは決してこの日の審査が甘かったというわけではない。事実、審査した3製品の中には「要改善」ポイントが指摘され、「改善後に再審査」扱いとなったものもある。この指摘には

当日、現場になかったサイズや形状の自転車を使用した場合を想定したものも含まれていたことから、現場を熟知した審査員ならではの厳しい審査が行われていたことがわかる。

子乗せ自転車用スライド式サイクルラックの認定第1号となったダイケン「SR-SW-30」について西出委員長は「スペック的にしっかり強度が確保されているイメージがあったが、実際かなり屈強な製品だった。スライドの方式もよく考えられていて、非常に滑らかに動く。そうしたベースの部分の開発が優れていたため、審査もスムーズに進んだ。技術基準が完成してからこの日まで予想以上に長くかかったが、今後の指針となる立派な製品が認定品第1号となり、よいスタートを切ることができたと思う。全国には駐輪場がたくさんあり、認定品が1社だけでももちろん十分ではない。これを皮切りに3社、4社と他のメーカーにも

無事生まれ駐輪場のさらなる安心、安全への新たな一歩が踏み出せたことを喜んだ。同製品の開発を担当したダイケンの松村賢開発部係長も「ベースとなる『SR-SW-27』は7～8年前に開発されたものだが、当初は時期尚早というか、今ほど子乗せ電動アシスト自転車専用ラックのニーズはなかった。それが5年前くらいから一



一般社団法人 自転車駐車場工業会・西出幸伸審査委員長(左)と株式会社ダイケン・松村賢開発部係長



現物審査には様々な形状、サイズの自転車が用意される



サイズや操作力などをチェック。図面ではわからない操作性などを厳しくチェックする



安全や安心に関わるどんな小さな問題も見逃すことのないよう、確認をしながら審査を進める。終了後にはメーカー担当者に詳細にフィードバック



気にニーズが高まり以後も増加が見込める中、公共の駐輪場等でも需要が高まることを考えれば認定を受けることは重要だと考えた。そして基準書と「SR-SW-27」を照らし合わせたところ一部部品を追加するだけで適合することが分かり、すぐに審査を受けようと思った。もともと社内基準を大きく超える強度のある製品で、それが功を奏することになった。ラックメーカーとして今後も自転車の変化に対応して優れた製品を作っていきたい」と、認定第1号となったことを喜び、自社製品の安全性への自信を深めていた。

前例がなかったということもあり、過去の審査を見てきた弊誌取材班としては1回でこの最終審査をパスするのは難しいと考えていたが、これはメーカー側も世の中の流れを汲み、子乗せ電動アシスト自転車にしっかりと対応していたという証明でもある。多くの駐輪場が安全対策として子乗せ電動アシスト自転車に関してはこれまでラックではなく平置き場に案内するのが一般的だったが、台数がどんどん増え立ち行かなくなっている現状もある。だがこれで、今後は徐々にその環境も改善されていくものと思われる。

DATA

一般社団法人 自転車駐車場工業会 : 03-3663-6284 <http://www.jichuko.net/>
株式会社ダイケン : 06-6392-5321 <https://www.daiken.ne.jp/>